

# 検査情報月報



横浜市衛生研究所

# 平成26年4月号 目次

## 【トピックス】

平成25年度 医動物・種類同定検査のまとめ(10～3月) .....	1
残留農薬検査(平成25年度 その3) .....	3
動物用医薬品検査結果 .....	5

## 【感染症発生動向調査】

感染症発生動向調査委員会報告 平成26年3月 .....	6
------------------------------	---

## 【情報提供】

衛生研究所WEBページ情報(平成26年3月分) .....	10
-------------------------------	----

## 平成25年度 医動物・種類同定検査のまとめ(10～3月)

医動物担当では、人の健康を害し、人に不快感を与える昆虫、ダニ、寄生虫等の試験・調査・研究を行っています。

その中の一つとして、市民、各区福祉保健センター、各市場検査所、事業者などの依頼を受け、昆虫類を中心とした種類同定検査を行っています。昆虫類の種類を同定することによって、発生源、発生時期、人に対する害などが分かるため、効果的な対策を立てることにつながります。平成25年10月から平成26年3月の種類同定検査件数は、12件でした。内訳は昆虫類11件(ハチ目6件、シミ目2件等)、その他の節足動物1件(クモ目1件)でした。

主な検査結果の詳細は以下のとおりです。

相談内容・発生状況等	写真 (状態、体色、大きさ)	同定結果	生態・その他
<p>自宅内で虫をみかける</p> <p>※同様の相談が1件あった</p>	 <p>雄有翅虫、黒色、約2mm</p>	<p>ヤマアリ亜科の雄有翅虫 (ハチ目)</p>	<p>本亜科は、温帯地方では大型で、活発に行動し、地上活動性が多い。 多くの種の営巣場所は地中である。</p>
<p>住宅内にアリがみられる(搬入検体には2種類のアリがみられた)</p>	<p>①</p>  <p>雌有翅虫、茶褐色、約8mm</p>	<p>①フタフシアリ亜科の雌有翅虫(ハチ目) ②ヤマアリ亜科の雄有翅虫(ハチ目)*</p> <p>* 検体の破損が激しいため写真不掲載</p>	<p>【結婚飛行について】 アリ類は決まった時期、無数の有翅虫(雌雄成虫)が、結婚飛行のため巣から飛び立つ。種類によって結婚飛行の時期は異なる。飛行を終えた雌雄成虫は、灯火、窓際に多数飛来し、不快害虫となることが多い。</p>
<p>木造住宅の広範囲に多数のアリがみられる</p>	 <p>働き蟻、褐色、約1.5mm</p>	<p>サクラアリ (ハチ目)</p>	<p>営巣場所は、日の当たる乾燥した石下、落葉層、倒木内などである。 有翅虫の飛出しは10～11月である。日本各地に分布する。</p>
<p>室内の壁の隙間で、アリを見かける</p>	 <p>働き蟻、茶褐色、約2mm</p>	<p>イエヒメアリ (ハチ目)</p>	<p>高断熱性の大型建築物や空調の完備した家屋に発生が見られる。巣は壁や家具の下などの1mmほどの隙間につくられる。 肉・魚・油脂などを好み食害する。</p>

相談内容・発生状況等	写真 (状態、体色、大きさ)	同定結果	生態・その他
<p>マンション内で虫がみられる</p> <p>※同様の相談が1件あった</p>	 <p>幼虫、銀白色、約3mm</p>	<p>シミ科の一種 (シミ目)</p>	<p>多くの種は野外に住み、腐食物を食べているが、一部の種類が家屋に住みつき、書籍や掛け軸、壁紙などを食害する。暗いところを好み、夜間活動性である。</p>
<p>施設内でハエが大量発生している</p>	 <p>成虫、黒褐色、約7mm</p>	<p>イエバエ (ハエ目)</p>	<p>幼虫の発生源は、糞、生ごみ類、動植物性の腐敗物である。屋内侵入性があり、衛生上重要な種である。 本種は、世界共通で、年に数世代を営む。</p>
<p>家屋内で虫がみられる</p>	 <p>頭部一部、黄褐色、約1.5mm</p>	<p>カメムシ目の頭部の一部 (カメムシ目)</p>	<p>体型は卵形、球形、長形で扁平なものなど多様である。 口器は完全な吸収型の口吻である。 食性も多様で、樹液、葉、茎、花、果実などを吸汁する。</p>
<p>たんす中の衣類に幼虫が付いていた</p>	 <p>幼虫、乳白色、約10mm</p>	<p>メイガ科の一種 (チョウ目)</p>	<p>本科のものは食品害虫として重要な種が多く、幼虫の食害状態は多様である。葉を巻くもの、茎や根および新梢、枝、幹に入り込むもの、果実や花に食入するもの、穀類や菓子類を食害するものなど種類は非常に多い。</p>
<p>家の畳上で蜘蛛を見つけた</p>	 <p>成体、黒褐色、約12mm</p>	<p>トタテグモ科の一種</p>	<p>地中や樹皮、岩の表面などに住居をつくる。背甲の中窩は、U字状である。日本では、2属4種が知られている。 本州以南に分布する。</p>

【 検査研究課 医動物担当 】

## 残留農薬検査(平成25年度 その3)

当所では、横浜市内に流通する農産物等の食品に残留する農薬の検査を行っています。平成25年度に検査項目の見直しを行い、農産物ごとに検査項目を設定しました。

今回は、平成26年1月から3月までに食品専門監視班より搬入された農産物等の検査結果を報告します。

### 1 市内産農産物

3月に搬入されたキャベツ(2検体)、こまつな(4検体)及びほうれんそう(4検体)の計10検体について検査を行いました。これらの結果を表1に示しました。ほうれんそう1検体からアゾキシストロビンが0.02ppm検出されましたが、基準値以下でした。

検査項目及び検出限界については表2に示しました。

表1 残留農薬検査結果

(H26年1月～H26年3月)

農産物	産地	検査検体数	農薬検出検体数	検出農薬名	検出値(ppm)	基準値(ppm)
市内産農産物						
キャベツ	横浜市	2	0			
こまつな	横浜市	4	0			
ほうれんそう	横浜市	4	1	アゾキシストロビン	0.02	30

表2 農薬の検査項目及び検出限界

農薬名	検出限界(ppm)	キャベツ		農薬名	検出限界(ppm)	ほうれんそう	
		こまつな	ほうれんそう			こまつな	ほうれんそう
BHC(α, β, γ及びδの和)	0.005	—*1	○*1	クミルロン	0.01	○	○
DDT(DDE, DDD及びDDTの和*2)	0.005	○	○	クロキントセット-メキシル	0.01	○	○
EPN	0.01	○	○	クロチアニジン	0.01	○	○
アクリナトリン	0.01	○	○	クロマフェノジド	0.01	○	○
アザメチホス	0.01	○	○	クロリダゾン	0.01	○	○
アセタミプリド	0.01	○	○	クロルピリホス	0.01	○	○
アゾキシストロビン	0.01	○	○	クロルピリホスメチル	0.01	○	○
アニロホス	0.01	○	○	クロルフェナピル	0.01	○	○
イプロバリカルブ	0.01	○	○	クロルフェンソン	0.01	○	○
イプロベンホス	0.01	○	○	クロルフェンビンホス	0.01	○	○
イミダクロプリド	0.01	○	○	クロロクスロン	0.01	○	○
インダノファン	0.01	○	○	シアゾファミド	0.01	○	○
インドキサカルブ	0.01	○	○	シアノフェンホス	0.01	○	○
エチオン	0.01	○	○	シアノホス	0.01	○	○
エトプロホス	0.005	○	○	ジウロン	0.01	○	○
エトリムホス	0.01	○	○	ジオキサベンゾホス	0.01	○	○
エンドスルファン(α及びβの和)	0.005	○	○	ジクロフェンチオン	0.01	○	○
エンドリン	0.005	○	—	ジクロラン	0.01	—	○
オキサジクロメホン	0.01	—	○	ジコホール	0.01	○	○
オキサミル	0.01	○	○	シハロトリン	0.01	○	○
オキシカルボキシシン	0.01	○	○	ジフェノコナゾール	0.01	○	○
オリザリン	0.01	○	○	シフルトリン	0.01	○	—
カズサホス	0.01	○	○	シフルフェナミド	0.01	○	○
カフェンストロール	0.01	○	○	シペルメトリン	0.01	○	—
カルバリル	0.01	○	○	ジメトモルフ	0.01	○	○
カルプロパミド	0.01	○	○	スルプロホス	0.01	○	○

表2 農薬の検査項目及び検出限界(続き)

農薬名	検出限界 (ppm)	キ ヤ ベ ツ	ほ う れ ん そ う こ ま じ な	農薬名	検出限界 (ppm)	キ ヤ ベ ツ	ほ う れ ん そ う こ ま じ な
ダイアジノン	0.01	○	○	フェンピロキシメート	0.01	○	○
ダイムロン	0.01	○	○	フェンプロパトリン	0.01	○	—
チアクロプリド	0.01	○	○	ブタフェナシル	0.01	○	○
チアメトキサム	0.01	—	○	ブタミホス	0.01	○	○
テトラクロルビンホス	0.01	○	○	フラメピル	0.01	○	○
テトラジホン	0.01	○	○	フルシトリネート	0.01	○	—
テブチウロン	0.01	○	○	フルバリネート	0.01	○	—
テブフェノジド	0.01	○	○	フルフェナセット	0.01	○	○
テフルトリン	0.01	○	—	フルフェノクスロン	0.01	○	○
トラルコキシジム	0.01	○	○	フルリドン	0.01	○	○
トリチコナゾール	0.01	○	○	プロシミドン	0.01	○	○
トリフルムロン	0.01	○	○	プロチオホス	0.01	○	○
トルクロホスメチル	0.01	○	○	プロピザミド	0.01	○	—
ノバルロン	0.01	○	○	ヘキサフルムロン	0.01	—	○
パラチオン	0.01	○	○	ヘキシチアゾクス	0.01	—	○
パラチオンメチル	0.01	○	○	ヘプタクロル(エポキシドを含む)	0.005	—	○
ピフェントリン	0.01	○	○	ペルメトリン	0.01	○	○
ピラクロストロビン	0.01	—	○	ペンシクロン	0.01	○	○
ピラゾリネート	0.01	—	○	ベンゾフェナップ	0.01	○	○
ピリフタリド	0.01	○	○	ベンダイオカルブ	0.01	○	○
ピリミカーブ	0.01	○	○	ペントキサゾン	0.01	—	○
ピリミホスメチル	0.01	○	○	ボスカリド	0.01	○	○
ファモキサドン	0.01	○	○	ホスチアゼート	0.01	○	○
フェントロチオン	0.01	○	○	マラチオン	0.01	○	○
フェノキシカルブ	0.01	○	○	メタバベンズチアズロン	0.01	○	○
フェノブカルブ	0.01	○	○	メトキシフェノジド	0.01	○	○
フェリムゾン	0.01	—	○	メビンホス	0.01	○	○
フェンアミドン	0.01	○	○	モノリニュロン	0.01	○	○
フェンクロルホス	0.01	○	○	ラクトフェン	0.01	○	○
フェンスルホチオン	0.01	○	○	リニュロン	0.01	○	○
フェントエート	0.01	○	○	リンデン( $\gamma$ -BHC)	0.002	○	○
フェントラザミド	0.01	○	○	ルフェヌロン	0.01	○	○
フェンバレレート	0.01	○	—				

\*1 ○:実施、—:実施せず

\*2 DDTはp,p'-DDE、p,p'-DDD、o,p'-DDT及びp,p'-DDTの和

【農薬解説】

○アゾキシストロビン

『アミスター』などの商品名で販売されている殺菌剤で、多くの菌類に対し強い抗菌効果があります。

※参考文献

・社団法人日本植物防疫協会、農薬ハンドブック2011年版



## 動物用医薬品検査結果



当所では、食品中の動物用医薬品検査を行っています。今回は、食品専門監視班が収去及び買取りした魚介類の検査結果を報告します。

平成26年1月に市内を流通している、さけ目魚類(銀鮭1件、サーモントラウト2件)、すずき目魚類(ブリ3件、マダイ1件)及び甲殻類(エビ3件)について検査を行いました。また、2月にインターネットを通じて購入した、すずき目魚類(マハタ1件)、その他の魚類(アユ1件、フグ2件)及び甲殻類(エビ3件)について検査を行いました。その結果、表に示すとおり全ての項目で不検出でした。

表 抗生物質、合成抗菌剤の検査結果及び検出限界

項目名	検査結果				検出限界
	さけ目 (3件)	すずき目 (5件)	その他魚類 (3件)	甲殻類 (6件)	
<b>【抗生物質】</b>					
オキシテトラサイクリン	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.02
クロルテトラサイクリン	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.03
テトラサイクリン	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.02
クロラムフェニコール	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.0005
<b>【合成抗菌剤】</b>					
ニトロフラントイン	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.001
フラゾリドン	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.001
フラルタドン	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.001
エンロフロキサシン(シプロフロキサシンを含む)	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.01
オキシリニック酸	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.01
オフロキサシン	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.01
オルビフロキサシン	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.01
オルメトプリム	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.01
クロピドール	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.01
サラフロキサシン	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.01
ジフロキサシン	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.01
スルファキノキサリン	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.01
スルファジアジン	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.01
スルファジミジン	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.01
スルファジメキシシン	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.01
スルファドキシシン	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.01
スルファピリジン	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.01
スルファメキサゾール	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.01
スルファメキシピリダジン	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.01
スルファメラジン	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.01
スルファモノメキシシン	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.01
ダノフロキサシン	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.01
チアンフェニコール	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.01
トリメトプリム	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.01
ナリジクス酸	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.01
ノルフロキサシン	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.01
ピロミド酸	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.01
フルメキン	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.01
フルフェニコール	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.01
マルボフロキサシン	N.D.	N.D.	N.D.	N.D.	0.01

単位:ppm N.D.:不検出

【 検査研究課 微量汚染物担当 】

## 感染症発生動向調査委員会報告 3月

### 《今月のトピックス》

- インフルエンザは減少傾向ですが、警報解除基準値(定点あたり 10.00)を依然として上回っています。
- 麻しんの海外輸入例が首都圏で増加しています。
- A 型肝炎の報告が増加しています。

### 全数把握疾患 3月期に報告された全数把握疾患

A型肝炎	2件	後天性免疫不全症候群(HIV感染症を含む)	5件
アメーバ赤痢	2件	侵襲性肺炎球菌感染症	8件
急性脳炎	1件	風しん	1件
クロイツフェルト・ヤコブ病	1件	麻しん	1件
劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1件		

＜A型肝炎＞2件の報告がありました。どちらも経口感染が推定されており、直近の海外渡航歴はありませんでした。全国的にA型肝炎の報告が増加しており、厚生労働省から注意喚起の[事務連絡](#)が出されています。報告の7割程は国内が推定または確定感染地域とされています([IDWR 2014年第7号<注目すべき感染症>2014年のA型肝炎の増加](#))。国内での感染経路としては、魚介類の生食などによる経口感染や、性的接触などが報告されています。市内でも昨年は4件の報告でしたが、今年は既に5件報告(すべて直近の渡航歴は確認できていません。)されており、注意が必要です。

＜アメーバ赤痢＞腸管アメーバ症2件の報告があり、1件は国内での感染が推定されていますが感染経路等不明、もう1件は感染経路感染地域等不明でした。

＜急性脳炎＞1件の学童の報告があり、インフルエンザAH1pdm09が検出されています。

＜クロイツフェルト・ヤコブ病＞1件の古典型CJDの報告があり、診断の確実度はほぼ確実です。

＜劇症型溶血性レンサ球菌感染症＞30歳代女性の報告が1件あり、血清型はA群でした。感染原因感染経路は不明です。

＜後天性免疫不全症候群(HIV感染症を含む)＞無症状病原体保有者3件、AIDS 2件の報告がありました。無症状病原体保有者では、2件が国内での同性間性的接触による感染が推定されており、もう1件は感染経路感染地域等不明でした。AIDSでは、1件がHIV消耗性症候群を認め、国内での異性間性的接触による感染が推定されており、もう1件はカンジダ症(食道)、サイトメガロウイルス感染症とHIV脳症を認め、国内での同性間性的接触による感染が推定されています。

＜侵襲性肺炎球菌感染症＞8件(幼児1件、成人7件)の報告がありました。そのうち、幼児1件(血清型33型)はワクチン接種歴が3回ありましたが、成人例6件(血清型19型2件、15型、7型、6型、3型、型別不能型それぞれ1件)ではワクチン接種歴が確認できませんでした。予防にはワクチン接種が重要です。

＜風しん＞男性1件(ワクチン接種歴不明)の報告がありました。風しんは従来2月～3月の早春から初夏頃が流行時期なので今後の注意が必要です。先天性風しん症候群予防のため、妊娠を予定・希望している女性は予防接種を受けましょう。流行の抑制には男性の予防接種も重要です。先天性風しん症候群の発生には、妊婦が風しんに罹患してから出産するまでの期間のずれがあるので注意が必要です。

＜麻しん＞1件の報告がありました。30歳代女性で遺伝子型D9(海外由来の麻しんウイルスのタイプ)が検出されていますが、海外渡航歴はありませんでした。現在フィリピンなどでは麻しんが流行しており、海外からの輸入例が、特に首都圏で増えています。海外渡航歴や海外の人との接触が考えられる患者の診察では留意が必要です。さらに、国内発生の事例では、本人の気づかないところで海外からの輸入例と接触し、感染したことが疑われる事例が報告されているので注意が必要です(参考:[麻しん臨時情報](#))。麻しんの予防には2回の予防接種が必要です。定期予防接種(1回目:1歳以上2歳未満、2回目:5歳から7歳未満で小学校就学前1年間)で、麻しん・風しん混合ワクチン(MRワクチン)を確実に接種しましょう。麻しんの検査診断にあたっては国立感染症研究所の「[麻しん検査診断アルゴリズム](#)」をご参照ください。また、診断の確定には適切な時期のPCR検査が有用です。検査については最寄りの福祉保健センターにご連絡ください。

**定点把握疾患** 平成26年2月24日から平成26年3月23日まで  
 (平成26年第9週から平成26年第12週まで。ただし、性感染症については平成26年2月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成26年 週一月日対照表

第9週	2月24日～3月2日
第10週	3月3日～3月9日
第11週	3月10日～3月16日
第12週	3月17日～3月23日

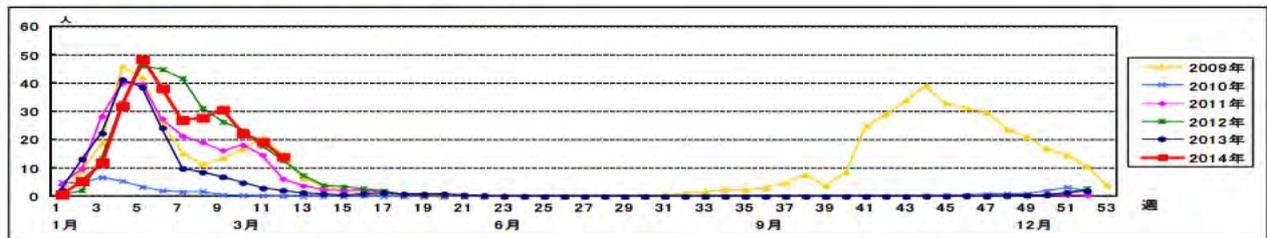
**1 患者定点からの情報**

市内の患者定点は、小児科定点:92か所、内科定点:60か所、眼科定点:19か所、性感染症定点:27か所、基幹(病院)定点:4か所の計202か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の11感染症を報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計152定点から報告されます。

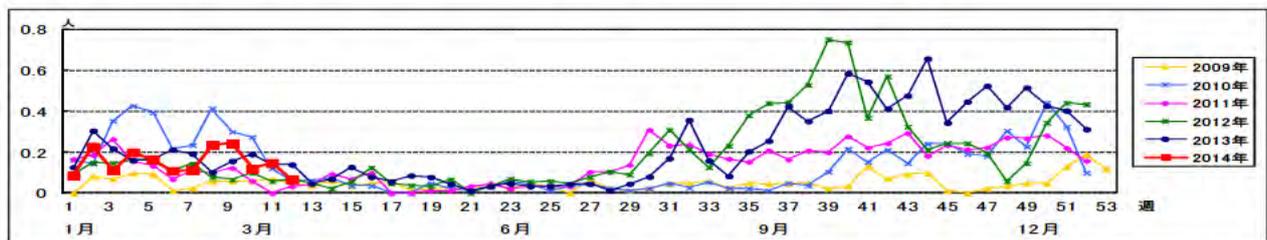
<インフルエンザ>市全体の定点あたりの患者報告数は減少傾向で、第12週は14.01となりましたが、まだ警報解除基準値(10.00)を上回っています。第12週にはAH1pdm09型による急性脳症が報告されており、まだ注意が必要です。迅速キット結果報告ではB型が9割近くを占めていますが、衛生研究所で検出した結果では山形系統が多く検出されています。また、衛生研究所でAH1pdm09型の76株を検査したところ、耐性株(275Y)が1株みつかりました。北海道で地域流行していた株との関連については現在検査中です。

◆横浜市インフルエンザ臨時情報(衛生研究所)

◆インフルエンザ予防チラシ(横浜市)

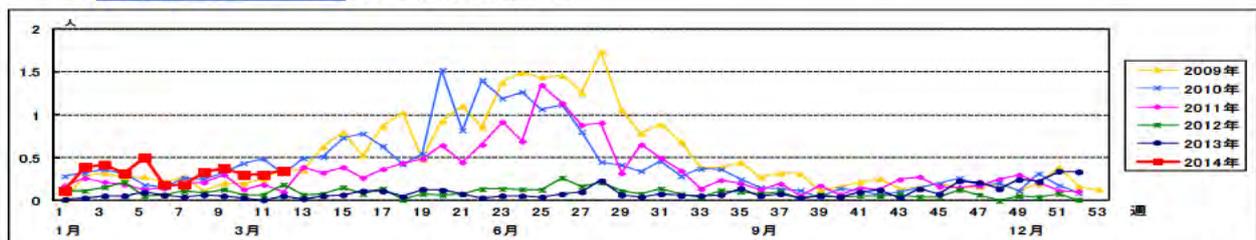


<RSウイルス感染症>第12週は定点あたり0.07と、報告は落ち着いています。



<伝染性紅斑>第12週は定点あたり0.35と、例年に比べ時期としては報告数が多くなっています。伝染性紅斑は典型的なヒトパルボウイルスB19(以下B19)感染症の臨床像です。B19感染症で注意すべきものの一つとして、妊婦感染による胎児の異常(胎児水腫)および流産があります。

◆伝染性紅斑について(国立感染症研究所)



<性感染症>2月は、性器クラミジア感染症は男性が16件、女性が7件でした。性器ヘルペス感染症は男性が4件、女性が6件です。尖圭コンジローマは男性3件、女性が0件でした。淋菌感染症は男性が23件、女性が0件でした。

<基幹定点週報>マイコプラズマ肺炎は第9週0.25、第10週0.25、第11週0.75、第12週0.00と落ち着いています。感染性胃腸炎(ロタウイルス)は第9週0.50、第10週0.00、第11週0.75、第12週0.00となっています。細菌性髄膜炎、無菌性髄膜炎、クラミジア肺炎の報告はありませんでした。

<基幹定点月報>2月はメチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症3件、ペニシリン耐性肺炎球菌感染症1件の報告がありました。薬剤耐性緑膿菌感染症、薬剤耐性アシネトバクター感染症の報告はありませんでした。

【 感染症・疫学情報課 】

## 2 病原体定点からの情報

市内の病原体定点は、小児科定点:8か所、インフルエンザ(内科)定点:3か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:4か所の計16か所を設定しています。

検体採取は、小児科定点とインフルエンザ定点では定期的に行っており、小児科定点は9か所を2グループに分けて毎週1グループで実施しています。また、インフルエンザ定点では特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。

眼科と基幹定点では、検体採取は対象疾患の患者から検体を採取できたときにのみ行っています。

### <ウイルス検査>

3月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点47件(鼻咽頭ぬぐい液46件、嘔吐物1件)、内科定点18件(鼻咽頭ぬぐい液18件)、基幹定点3件(鼻咽頭ぬぐい液2件、キット残液1件)で、定点外医療機関からは5件(鼻咽頭ぬぐい液5件、気管支吸引液1件、髄液1件、尿1件、血漿1件)でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点はインフルエンザ(疑い含む)31人、下気道炎7人、上気道炎5人、アデノウイルス感染症2人、および胃腸炎1人、手足口病各1人、内科定点はインフルエンザ(疑い含む)17人、上気道炎1人、基幹定点はインフルエンザ2人、下気道炎1人、定点外医療機関はインフルエンザ(疑い含む)3人、無菌性髄膜炎1人、先天性風疹症候群1人でした。

4月10日現在、小児科定点のインフルエンザ患者18人と上下気道炎3人、内科定点のインフルエンザ患者9人からインフルエンザB型山形系統ウイルス(アデノウイルス2型と重複1人、アデノウイルス遺伝子と重複2人、パラインフルエンザ1型遺伝子と重複2人、パラインフルエンザ2型遺伝子と重複1人、ヒューマンメタニューモウイルス遺伝子と重複1人、RSウイルス遺伝子と重複1人)、小児科定点のインフルエンザ患者6人とアデノウイルス感染症患者1人、内科定点のインフルエンザ患者3人からインフルエンザB型Victoria系統ウイルス(アデノウイルス3型と重複1人、パラインフルエンザ3型遺伝子と重複1人、ヒューマンメタニューモウイルス遺伝子と重複1人、パラインフルエンザ3型遺伝子とRSウイルス遺伝子との重複1人)、小児科定点のインフルエンザ患者6人、内科定点のインフルエンザ患者1人、基幹定点のインフルエンザ患者2人、定点外医療機関の急性脳症患者1人からインフルエンザAH1pdm09ウイルス(パラインフルエンザ1型遺伝子と重複1人、ヒューマンコロナウイルス遺伝子と重複1人)、内科定点のインフルエンザ患者2人からインフルエンザAH3型ウイルスが分離されています。

これ以外に遺伝子検査では、小児科定点の上気道炎患者2人と下気道炎患者2人、基幹定点の下気道炎患者1人からヒューマンコロナウイルス、小児科定点のインフルエンザ患者1人と下気道炎患者1人、内科定点の副鼻腔炎患者1人からパラインフルエンザ1型(ライノウイルスとの重複1人)、小児科定点のアデノウイルス感染症患者1人と上気道炎患者1人からアデノウイルス、内科定点のインフルエンザ疑い患者1人からインフルエンザB型山形系統ウイルスとヒューマンコロナウイルス、小児科定点の手足口病疑い患者1人からライノウイルス、定点外医療機関の先天性風疹症候群患者1人からルベラウイルスの遺伝子が検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

【 検査研究課 ウイルス担当 】

### <細菌検査>

3月の感染性胃腸炎関係の受付は、基幹定点から6件、その他が5件でいずれも病原菌は検出されませんでした。

その他の感染症は小児科から3件、基幹定点から2件、その他が18件でした。

(次ページに表)

表 感染症発生動向調査における病原体検査(3月)

感染性胃腸炎

検査年月 定点の区別	3月			2014年1月～3月		
	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
件数	0	6	5	0	38	10
菌種名						
赤痢菌						1
サルモネラ					24	
不検出	0	6	5	0	14	9

その他の感染症

検査年月 定点の区別	3月			2014年1月～3月		
	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
件数	3	2	18	12	9	58
菌種名						
A群溶血性レンサ球菌			1			1
T1						
T6	1			5		
T12	1			3		
型別不能	1			2		
B群溶血性レンサ球菌			3			5
G群溶血性レンサ球菌						1
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌		1			4	
<i>Legionella pneumophila</i>			1			2
インフルエンザ菌						2
肺炎球菌			11	1		44
百日咳		1			1	
その他					4	1
不検出	0	0	2	1	0	2

\*:定点以外医療機関等(届出疾病の検査依頼)

T(T型別):A群溶血性レンサ球菌の菌体表面のトリプシン耐性T蛋白を用いた型別方法

【 検査研究課 細菌担当 】

# 衛生研究所WEBページ情報

(アクセス件数・順位 平成26年2月分、電子メールによる問い合わせ・追加・更新記事 平成26年3月分)

横浜市衛生研究所ホームページ(衛生研究所WEBページ)は、平成10年3月に開設され、感染症情報、保健情報、食品衛生情報、生活環境衛生情報等を提供しています。

今回は、平成26年2月のアクセス件数、アクセス順位及び平成26年3月の電子メールによる問い合わせ、WEB追加・更新記事について報告します。

なお、アクセス件数については総務局IT活用推進課から提供されたデータを基に集計しました。

## 1 利用状況

### (1) アクセス件数 (平成26年2月)

平成26年2月の総アクセス数は、174,684件でした。主な内訳は、感染症情報センター75.7%、食品衛生4.8%、保健情報6.6%、検査情報月報3.8%、生活環境衛生1.9%、薬事0.9%でした。

### (2) アクセス順位 (平成26年2月)

2月のアクセス順位(表1)

表1 平成26年2月 アクセス順位

順位	タイトル	件数
1	横浜市インフルエンザ流行情報10号	9,939
2	咽頭結膜熱について	5,570
3	衛生研究所トップページ	5,137
4	横浜市インフルエンザ2013/2014シーズンの流行情報	5,057
5	クロストリジウム-ディフィシル感染症について	4,940
6	感染症発生状況	4,514
7	臨時情報	3,560
8	横浜市感染症情報センター	3,234
9	B群レンサ球菌(GBS)感染症について	3,138
10	インフルエンザについて	2,737

データ提供:総務局IT活用推進課

は、第1位が「横浜市インフルエンザ流行情報10号」、第2位が「咽頭結膜熱について」、第3位が「衛生研究所トップページ」でした。

2月の総アクセス数は、前月に比べ17%ほど減少しました。今月の1位は、「横浜市インフルエンザ流行情報10号」でした。先月同様、全国的にインフルエンザが流行しているため、

10位内には、インフルエンザに関連するアクセス件数が多くを占めています。2位は「咽頭結膜熱について」でした。季節的に上気道疾患による疾病が流行しているためと考えられます。3位は「衛生研究所トップページ」でした。

厚生労働省のマイコプラズマ肺炎に関するQ&A(一般人向け) 平成24年10月改訂

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou30/index.html>

「横浜市インフルエンザ流行情報10号」に関連する情報

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/rinji/influenza/2013/rinji10.pdf>

「咽頭結膜熱について」に関連する情報

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/intou1.html>

「衛生研究所トップページ」に関連する情報

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/>

### (3) 電子メールによる問い合わせ（平成26年3月）

平成26年3月の問い合わせは、4件でした(表2)。

表2 平成26年3月 電子メールによる問い合わせ

内容	件数	回答部署
HIV検査について	1	感染症・疫学情報課
HP掲載グラフの転載許可について	1	感染症・疫学情報課
ニンニクの変色について(酸性下での青色変化)	1	検査研究課食品添加物担当
アメーバ赤痢について	1	感染症・疫学情報課

### 2 追加・更新記事（平成26年3月）

平成26年3月に追加・更新した主な記事は、14件でした(表3)。

表3 平成26年3月 追加・更新記事

掲載月日	内容	備考
3月 3日	感染症に気をつけよう(3月号)	掲載
3月 5日	チェコ共和国のこどもの定期予防接種について	更新
3月 5日	スロバキア共和国のこどもの定期予防接種について	掲載
3月 6日	横浜市インフルエンザ流行情報15号	掲載
3月12日	食物アレルギーとは	更新
3月12日	アレルギー物質の表示について	更新
3月12日	アレルギー関連の問い合わせなど	更新
3月13日	横浜市インフルエンザ流行情報16号	掲載
3月13日	ウクライナのこどもの定期予防接種について	掲載
3月17日	スロベニア共和国のこどもの定期予防接種について	掲載
3月20日	横浜市インフルエンザ流行情報17号	掲載
3月20日	エストニアのこどもの定期予防接種について	掲載
3月26日	リトアニアのこどもの定期予防接種について	掲載
3月27日	横浜市インフルエンザ流行情報18号	掲載

【 感染症・疫学情報課 】